

2026年度第2学期始業式校長挨拶（2026. 9. 8）

皆さんおはようございます。

2学期が始まり、元気な顔がそろい何よりだと思います。

今年の夏は日本列島は、いや世界は本当に自然災害に見舞われました。熊本地震、各地で発生した大雨・線状降水帯、台風、そしてネパール・中国の国境地帯における土石流の発生。武蔵生もあるいは保護者の皆様も被害や影響を受けた方がいるかと思います。心が痛みます。地球温暖化に伴う気候変動・異常気象の行く末が改めて心配な夏でした。そうした中、皆さんがそれぞれの夏休みを過ごして、今日元気な顔がそろったのは何よりだと思います。

さて、まず、私のお話の前に、この夏に活躍された武蔵生の様子をご紹介します。

まず水泳部です。

高校生。水球のリーグ戦で東京都4位。その結果、東京都代表として、7月18日から神奈川県平塚市で行われた関東大会に出場。惜しくも1回戦1点差で敗れましたが、頑張りました。おめでとうございます。

また中学水泳部も関東大会に出場しました。7月25日から前橋市で行われた関東予選に出場。惜しくも1勝2敗で敗退しましたが、頑張りました。おめでとうございます。

私の武蔵時代を思い出すと、当時は授業で水球をやっていました。ゴールデンウィーク明けの5月から2学期の9月まで、どの学年かは忘れましたが、やっていました。運動は決して苦手ではなかったのですが、きつかった。だって水の中でサッカーやバスケットをしているようなものでしたから。だから水球をやっている人は尊敬します。ぜひ頑張ってください。また、他の多くの部活動も秋の大会を目指して地道に取り組んでいたと思います。花開くことを願っています。

次に化学グランプリです。今年の化学グランプリは、全国の高校生2538名が参加。その中で、高2生の1人が上位21名にあたる金賞、別の高2生が上位40名にあたる銀賞、さらに高3生が上位74名にあたる銅賞を受賞しました。素晴らしいと思います。おめでとうございます。

次に生物学オリンピックです。今年の生物学オリンピックは全国の高校生1929名が参加。その中で高2生は、見事上位80名に入り予選突破。8月18日から大阪公立大学で行われた本選に参加し、惜しくも最上位入賞は果たせませんでしたが、見事敢闘賞を受賞しました。

次に将棋です。

メディアでも大きく報じられていますが、高3の國井勝太君が、9月5日に行われた第79回奨励会三段リーグ最終戦を経て、13勝5敗の成績をあげ、四段昇段決定。見事高校生プロ棋士になりました。すごいですね。早くからプロ棋士を目指しているということは聞いていましたが、不可能を可能にするね。そのチャレンジ精神に拍手を送りたいと思います。勝負の世界は厳しいと思います。ますますの精進を期待しています。おめでとうございます。

加えて、今日は卒業生の活躍について1人触れたいと思います。

97期生になりますが、東京大学野球部4年生の小村旺輔（こむらおうすけ）君が春の東京六大学リーグ戦で、三塁手の部門でベスト9に選ばれました。東大からは小村君1人ですが。ほかのポジションを見ると、その出身高校がすごい。大阪桐蔭、智辯和歌山、花巻東、報徳学園など。武蔵出身というのは異彩を放っていました。

私は小村君には思い出があります。皆さんご承知のように、校長面談で「たった一度の人生で何をやるの。高校卒業後の未来についてなんでもいいから言ってみて」といいますが、小村君はまっすぐに「東大で野球をします」と言っていました。その志通り、東大野球部に入りました。活躍していたとは聞いていましたが、ベスト9とはびっくりしました。同級生に聞くと、小村君は武蔵時代、いじられキャラだったそうですが、野球に対する姿勢、道具を大切に作る姿勢、そして寸暇を生かして勉強する姿勢はすごいものがあつたそうです。先の國井君もそうですが、改めて志をもってチャレンジすることの意味を教えられました。不可能はないね。また秋のリーグ戦でもがんばってほしいと思います。遠い空から応援します。おめでとうございます。

さて、私のお話です。今年も8月15日がやってきました。人々を苦しめたあの世界大戦が終わってから今年で81年目になりました。私は2学期の始業式は、戦争や平和の話をしたいと思っています。というのも、私は戦争は全く知りませんが、私が武蔵生だった50年前は、池袋でも傷痍軍人がハーモニカを吹いて街角で金銭を求めたり、大人の世代もみな戦争を経験していたために、保守も革新も「戦争はくりかえしてはいけない。戦死した命を無駄にしてはいけない」という社会の雰囲気があつたりしたと思います。ただ、その雰囲気は確実に薄れてきていると思います。それでよいのだろうか。やはり戦争は絶対にやってはいけないということを皆さんに伝える責務があると思うからです。

そこで、これまで原爆の話や、去年はアウシュビッツの話をしてきました。今年は武蔵と戦争の話をします。

武蔵の校舎が空襲で焼けたのは、1945年、昭和20年4月13日のことです。東京の下町

が焼け野原になったのは3月10日の東京大空襲。その1か月後でした。アメリカ軍が沖縄に上陸したのは4月1日で、壮絶な沖縄戦が始まっていました。後から考えるに、日本は一億玉砕に向けて、坂道を転げ落ちていった頃でした。

4月13日の空襲は、150機編成のB29により、夜の10時50分から夜中の3時半まで、赤羽の兵器工場を中心に練馬にかけた範囲に爆弾・焼夷弾が落とされたとのことでした。当時の旧制武蔵高校の校舎は、今の大学の3号館。時計台のある建物でした。幸い、校舎は残りましたが、その周辺にあった、今の正門前の高い建物の大学8号館から食堂のある2号館のあたり一帯になりますが、そこにあった学生寮、当時武蔵には寮がありました。それから錬心館と言われた剣道場、弓道場、木工金工室など800坪約2600㎡を焼失しました。剣道場が焼失したとのことですが、戦前武蔵の剣道部は強くて、インターハイを制し、その優勝旗も持っていたそうですが、それも焼失してしまい跡形もなかったことは痛恨であったと当時の剣道部員は語っています。今も濯川沿いに錬心館跡地の石碑が立っていますが、その場所は大学校舎建設に伴って移転されたもので、もとあった場所はちょっとずれています。ただ、この空襲では、幸いなことに武蔵における死傷者はいませんでした。

もっとも、この昭和20年の時点では、生徒たちは授業どころではなく勤労働員に駆り出されていました。1943年（昭和18年）6月に、学徒の勤労働員が始まり、武蔵生も陸軍兵器工場、日立製作所戸塚工場、日東金属工場などに学徒動員されています。また尋常中学の2、3年生。つまり今の中2、中3は、空襲を受けた直後の昭和20年4月17日から、当時軽井沢にあった、そして山上学校を行っていた青山寮などに集団疎開。近くの陸軍気象部軽井沢分室で、毎日天気図を書き写しながら、「神風作戦」と噂された台風を利用して戦局の打開を図る作戦の基礎資料づくりの仕事に動員されていました。そんな時代でした。

今お話したように、武蔵への空襲で亡くなった人はいませんでした。第二次世界大戦で亡くなった旧制武蔵高校の関係者は、教員が2名、卒業生は52名との記録があります。ただ、これは公式に把握している者ということで、実際の戦死者はもっと多いかもしれません。そうした中で、11期卒業、皆さんから見ると90年前くらいの先輩ですね。11期の相浦忠雄さんについては、のちに彼をしのんだ人により遺稿集が編纂されており、戦時下における彼の思いを知ることができます。

その相浦さんのことについて、追悼の意を込めて、少し触れたいと思います。

相浦忠雄さんは1918年（大正7年）に福岡県に生まれ、1932年（昭和7年）に上京して13歳で武蔵高等学校尋常科、今の中学校課程に入学。1936年（昭和11年）に武蔵高

等学校高等科、今の高校課程に入学。1937年（昭和12年）旧制7年制高校の6年生のとき、今の高2から高3というイメージでしょうが、武蔵には現在の国外研修の前身である外遊制度というのがあり、その外遊生2名のうち1名に選ばれました。優秀だったんですね。この外遊制度は、「外国に自由に行って見聞を広めてきなさい」という太っ腹な仕組みでしたが、相浦さんはのちに総理大臣になった同級生の宮澤喜一さんとともに外遊生に選ばれ、当初は中国内地に行く予定だったけれども、その年1937年7月に盧溝橋事件に端を発する日中戦争が勃発したため、急遽朝鮮と満州に行き先を変えて、異国に行ったそうです。

そして、2年後の1939年（昭和14年）に武蔵を卒業して、東京帝国大学、今の東大の法学部に入学。その1年生の夏に日米学生会議の日本代表の一員としてアメリカに行っています。そして1941年大学3年生のときに、外交官および高等文官試験。今でいう官僚試験、国家公務員試験に合格。その年の12月8日に太平洋戦争が勃発したために彼は12月25日に大学を3年で終えることとなり、繰り上げ卒業。翌1942年1月6日、商工省、いまの経済産業省の役人となります。しかし、その直後、1月20日に彼は役人をやめて、すぐに海軍に志願し、25倍の海軍主計科短期現役制度に応募して合格。そのまま海軍のエリートとして出世をしていきます。そしてこの同じ1942年5月に、カトリックの洗礼も受けています。そして1944年3月に航空母艦雲鷹（うんよう）主計長の職につき、同年9月17日、シンガポールに向かい出撃する途中、アメリカの潜水艦に雷撃され、南シナ海にて沈没。享年24歳10か月の人生を終えました。

相浦忠雄遺稿集には、相浦さんが、武蔵時代に書いたものなども収録されています。例えば、満州・朝鮮に行った国外研修報告書では、中国人、漢民族の民族性について書かれています。当時から指摘されていた漢民族の同化力について触れ、「その同化力があるゆえ、支那は疲れた。早晚滅びるといふ人がいるが、私にはそうは思われない」と断言しています。この報告書は共著のため、その記述がのちに総理になった宮沢さんのものか相浦さんのものかわからないけれど、時代が中国を見下す中、時代の風潮に流されない武蔵生らしさがあると私は思います。

また、遺稿集には、1939年大学1年のときに日米学生会議の一員としてアメリカに行ったときの報告書である「支那事変の投げる影」も収録されています。それによると、当時のアメリカ人が庶民の果てに至るまで、日本の中国侵略に対して強い批判感情を持っていること、にもかかわらず個々のアメリカ人は個々の日本人に親切であり、国家レベルの批判感情を個人に及ぼさないことなどが書かれています。アメリカの日本に対する厳しいまなざしを身をもって経験しつつ、1人の人間として、アメリカの人と豊かな交流をしたことがうかがえます。

そして、日米が開戦した 1941 年 12 月 8 日。相浦さんは 1 年後輩だった武蔵卒業生の近藤道生さん、のちに国税庁長官になりさらに博報堂の会長になったそうですが、その近藤さんと、まさに開戦の報に日本中が沸き立つその日、東大図書館の屋上にあがり、眼下に広がる東京の家並みを前に、唐突にこう言ったそうです。「君、これ全部、焼け野原になるんだよ」と。近藤さんが「そうでしょうか。日本の軍部もそこまでは手をうつでしょう」と戸惑いながら、相浦さんの横顔を覗き込む、相浦さんは迷いもなく「いやいや、必ずそうなる」と言って口元を引き結んだといいます。

皆さんは、この武蔵の大先輩で戦死していった相浦さんの話を聞いてどう思いますか。

私はこう思うんです。相浦さんは人知れず煩悶したんだろうなあと。国外研修で感じた「中国は滅びない」という未来予測。アメリカに行って感じたアメリカ人のまなざしの厳しさと包容力。その中国、アメリカでの経験を踏まえ、「日本は焼け野原になる」と思った予測にもかかわらず、自らはクリスチャンになり、海軍へと志願して散っていった命。彼は、煩悶しながらも、自分はどう生きるべきかを考えたんでしょうね。自ら果たすべき責任を考え、そして自らの未来を選択し、生を全うしたのだと思います。もし相浦さんが生きていたら、おそらくや、宮沢総理にも並び立つ、戦後日本を支えた大人物になっていたと思います。

戦争というのは、絶対やってはいけない。だから戦争に進んでいく状況をつくりだしてはいけないと思います。相浦さんが煩悶するような状況は作り出してはいけない。

私は、人類は世界大戦という反省に立って、過ちは絶対に繰り返さないと決意していたと思っていました。

しかし、ここにきての世界情勢を見ると、戦後打ち立てられた国際協調や法の支配という考えに代わって、力の支配や大国同士の同盟形成という論理がまかり通り、寛容や多様性の精神が危うくなっているようにさえ思います。それはまるで 19 世紀から 20 世紀、第二次世界大戦前夜の様相です。背景にはグローバル化に伴う格差拡大や移民の問題、そしてエリートへの不信というものがあるとは思いますが、深い教養や鋭い洞察力とは裏腹の薄っぺらい大衆受けする言説が人々の心をつかみやすい状況が広がっているように思います。

そうした状況の中で、あの戦争で痛い目にあった日本はどう生きていくのか。本当に難しい時代になってきました。だからこそ、私は武蔵生に、相浦さんが見通していたような、しっかり真実を見る目を持ってほしい。世論や雰囲気流されずに、改めて自ら調べ

自ら考えるという「自調自考」の精神。そして考えるだけでなく、自分の意見を表明したり行動に移していき、起きたリアクションを受け入れて責任を負おうとする「自動自責」の精神を培ってほしいと思います。

今日お話しした相浦さんの無念の思い、煩悶をもう武蔵生は繰り返してはいけないと私は強く思います。時代や社会はすぐには変わるものではありません。少しずつ少しずつ動いていきます。先を見通しつつ、今何をすべきかを考えていってほしいと思います。武蔵の空間には三理想が潜在的に根付いています。特に東西文化融合。異質ものをくっつけるということは大切だと思います。私は武蔵生に大いに期待しています。

今日の武蔵と戦争の話、さらに相浦さんの話は、武蔵学園百年史に詳しく載っています。図書館にもありますし、HP からも見られますので、興味のある方はぜひ見てください。

今日から2学期が始まります。このあと留学生の皆さんの紹介もしたいと思います。今年は8名の方が来てくれました。嬉しく思っています。

ぜひ皆さんそれぞれにとって素晴らしい2学期にしてください。以上で私の話を終わります。ご清聴いただきありがとうございました。